

中長期目標	○未来に向かい、自分らしく輝き、豊かに生きる子どもの育成	今年度の重点目標	○学ぶ意欲と自己肯定感を高める主体的・対話的な授業づくり ○安全で安心な学校の実現 ○「チームくらう」の推進 ○お互い認め合い、高めあう教職員集団の実現
-------	------------------------------	----------	---

評価項目	部	評価の具体項目	年	度	当	初	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価結果 (10)月
	小学部	○一人一人が主体的に活動したり表現したりする姿へ繋げる指導○支援の工夫		現状			【A部門】 ○担任に限らず、その他の指導者に対しても児童が自分なりの方法で表現したり、自分の思いを伝えたりする姿が増えてきているが、さらにコミュニケーションの幅(いつでも、どこでも、誰とでも)を広げることができるよう、それぞれの対応力、表現力を高めていく必要がある。 【B部門】 ○児童が主体的に活動したり、自分なりの方法で伝えたり表現したりすることができるようになってきている。さらに、それらを定着したり幅を広げたりするために、安心できる環境を設定し、教育活動全般を通して、発達段階に応じた表出や表現できる場を作っていく必要がある。	○児童が主体的に活動したり、自分なりの方法で表現したりできる場の設定や学習内容を考えた授業づくりを行う。 ○児童の実態や目指す姿、そこに向かう段階等を指導者間で共有し、学習内容や指導・支援方法を検討する。また、よりよい授業づくりのために、事後には評価・改善を行う。 ○効果的な学習活動や支援等について指導者個々が自己研鑽を積むだけでなく、指導者間で児童の表出力や表現力を広げるために有効な支援ツールや教材・教具の情報共有をしながら、授業づくりを通して指導者間で共に高め合い、学び合う。	○68.8%の指導者が、児童が主体的に活動したり自分なりの方法で表現したりできる場の設定や学習活動を工夫することができたと答えている。しかし、まだ不十分であると自己評価する指導者が31.2%いる。 ○78.1%の指導者が、効果的な学習活動や支援について、指導員間で支援ツールや教材・教具についての情報交換を行うことができたと答えている。しかし、残りの21.9%の指導者が、情報交換する機会が持てなかった、日程調整不足だった(早めの段取りができなかった)等の理由で、指導者間で学習活動と児童の支援について共有できていないと思っている。 ○場の設定や学習活動の工夫、情報交換・情報共有したことにより、児童が主体的に活動したり、それぞれの方法で気持ちを伝えたり、表現したりする姿が見られたり増えたりしたという声も多かった。	B ○学習活動や1学期、情報交換・共有ができたという指導者の取り組み方法(短時間でも情報交換をする時間を作るとか紙ベースで授業内容とその支援について情報共有をする等)について例を挙げ、今後の取り組みへの参考とした。それも参考にしながら、今後も場の設定や学習活動の工夫、情報交換等を継続していく。 ○児童の実態、目標の確認と共に、授業についての指導者の役割、配置等についても確認する機会を設けていく。
学ぶ意欲と自己肯定感を高める主体的・対話的な授業づくり	中学部	○伝える相手を意識した表現力の育成を目指した授業の充実					【A部門】 ○聞き覚えのある声に反応したり、支援者からの働きかけに応えることができる姿が増えてきている。さらに相手の働きかけを受け入れることができるように心身の状態を整えたり、自分の気持ちや思いをよりの確に伝えることができるような方法の幅を広げていく必要がある。 【B部門】 ○カードやジェスチャー、発声や表情など自分なりの方法で、教師や友達に思いを伝えようとして、教えてあげたりする生徒が増えてきている。 ○国語の5W1Hでの文章構成の学習や自立活動でのコミュニケーションの学習などを通して、出来事などを説明したり、自分も気持ちを表現したりする力が伸びてきている。生徒同士のやり取りの中では、相手の気持ちを考えたり、相手にわかるように伝えたりといった「相手」を意識した伝え方には至っていないこともある。	○日々の授業や支援方法、教材教具についての情報交換を重ね、指導者同士の学び合いを深める。 ○指導者とのやり取りだけではなく、生徒の実態に合わせた、生徒同士が対話できるような学習スタイルや、生徒が進んで考えたり、生徒に進行を任せたりする場面の設定など工夫する。 ○指導者が生徒同士のやり取りをコーディネートしながら、成功体験を積めるようにする。	○学部の指導者のうち、「学部の目標を意識した授業づくりに努めることができた」と回答した指導者が73%、「生徒が相手を意識したやり取りができるようになってきていること」を「十分感じる」が10%、「少し感じる」が84%と、日々の指導の中で生徒が成長してきていることを多くの指導者が感じている。 ○1学期の反省の中で、生徒の様子についての捉え方や生徒への有効な支援、授業づくりの工夫などについて、もっと情報交換したいと答えた指導者も多く、会議等の多い中で情報共有をどのように設定するかが課題である。 ○「相手を意識したやりとり、コミュニケーションの指導として、言い方や伝え方、伝える内容の構成といった国語の指導内容と、自立活動のコミュニケーション、人間関係の形成、環境の把握などの指導内容とを整理し、指導する場面や内容の工夫を図っていく必要がある。	B ○「相手を意識したやり取り」のイメージを学部指導者間で共有し、指導の効率化を図る。 ○指導や学習形態、指導内容の改善、工夫について情報共有する場を、定例の学部会、授業づくりの時間に設定する。 ○生徒の課題・つまづきについての分析を、来年度の自立活動の個別の指導計画作成とリンクさせて取り組み、指導内容の整理を行う。

	高等部	○周りの人(指導者と生徒、もしくは、生徒同士)とのやりとりの中で、自分の意思や、なぜそう考えたかを相手に伝えることができる生徒の育成	【単一障がい学級】 ○生徒同士のやり取りが、増えてきている。しかし、授業中や興味がある話題の中で自分の考え方を伝えることはできても、普段の会話では難しい。 【重複障がい学級】 ○指導者が、「なぜそう思ったの？」と問いかけることで、理由を考えようとする姿が増えてきた。今後は、生徒の実態に応じた表現方法を広げることや、指導者の受け止め方を工夫することで、生徒の伝えたい思いが伝わったと実感する経験を増やしていきたい。	○周りの人とのやり取りの中で、自分の考えを、なぜそう考えたのか、それぞれの表現方法で相手に伝えることができる。 ※学部アンケートで、教員の8割以上が「できた」と回答	○自分の意思表示だけで終わるのではなく、なぜそう考えたかその理由を聞く。 ○生徒同士で会話のやり取りをすることができる話題や、授業の仕掛けを行う。 ○それぞれの生徒の伝え方や表現方法を指導者間で共通理解しておき、伝わったこと、伝わらなかったことをフィードバックすることで、伝わった実感を持つことができるようにする。	○7月実施のアンケートでは、「生徒が、まわりの人とのやりとりの中で、自分の考えを、なぜそう考えたのか、それぞれの表現方法で、相手に伝えることができるようになる場の設定や授業づくりができたか？」に対して、『できた』52%、『十分でできたとは言えない』48%であった。生徒の実態を的確に把握できなかったり、どのように場の設定や授業づくりに取り組んでよいかわからなかったりしたこと、この数字になったと思われる。今後の授業作りの取り組みを通して、目標達成を目指し、取り組んでいきたい。	C	○生徒が答えたことに対して、「なぜ」「どうして」などと聞き返す場面を意図的に増やす。 ○相手への伝え方がうまくいきにくい生徒には、タブレットやカード等を個に応じて使用する等の工夫を凝らす。 ○学部授業づくり研究の中で、お互いの授業実践を見ながら学ぶ機会を作り、授業の中で、生徒が、なぜ、どのように考えたか、どう引き出していくかについて、指導者間で情報交換しながら学び合う。
評価項目	部	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
お互い認め合い、高めあう教職員集団の実現	授業づくり部	○児童生徒が主体的・対話的になるような授業づくり	○全体授業公開では、各授業の良いところを見つけるだけでなく、建設的なやり取りによりアイデアや改善点等の活発な意見交換ができた。発表者にとっても参観者にとっても実りある研究となった。また、普段から「主体的・対話的な授業づくり」を意識して指導、支援を行い、児童生徒の表現力の向上が日常的に見られるようになった。 ○今年度はさらに、主体的・対話的な授業づくりについて、各学部の授業グループでの建設的な話し合いを一層進めていく必要がある。	○授業づくりを通して指導者同士が建設的なやり取りによりアイデアや改善点について話し合い、専門性と授業力向上を図ることができる。 ※教職員アンケートで8割以上が「できた」と回答	○各学部では、計画から実施まで建設的な話し合いが行われるように授業グループを設定する。 ○授業者と参観者が授業について建設的に話し合うことができる場を年間8回以上設定する。 ○授業改善に関わる研修を企画し、目指していく授業の在り方について教職員の共通理解を図る。	○今年度は外部講師(畿央大学准教授)より指導助言を受けている。夏季研修では、「主体的・対話的な授業づくりについて」をテーマに講義をしていただいた。学習指導要領に明記されている3つの資質・能力を育成するために授業改善をどのようにすべきか考えを深めていった。講義を通して具体的な児童生徒の姿や自身の授業実践を思い浮かべ、どのような授業をつくっていけば良いのかグループで検討し合い2学期へのイメージを膨らませることに繋がった。研修後のアンケートでは、約97%の教員が「主体的・対話的な視点が理解できた」「教科の見方・考え方を授業の中に取り入れることについて更に考えが深まった」と回答している。 ○全体授業公開に向けて、各グループで話し合いをしているところである。単元・題材シートを活用しながら学習指導要領を理解し、教科の見方・考え方を明確にして授業づくりを進めている。	B	○学習指導要領の理解を深め、教科の見方・考え方を踏まえた指導目標を立てられるよう、単元・題材シートの内容を整理し活用する。 ○11月・12月に全体授業研究会を計画しており、全教員が他学部の授業を動画で視聴し主体的・対話的な授業づくりの在り方について協議する予定である。
	教務部	○学習活動への評価規準の活用を目指した諸帳簿のよりいっそうの整備	○各教科の内容一覧や評価規準を明示することで、それらを活用しながら評価等を行う指導者が増えた。反面、評価の時のみに規準を用いるという実態もある。	○評価規準を意識した学習活動の展開を通して、指導と評価の一体化を推進する。 ※教職員の評価シート記入率が8割を超える。	○本校独自の評価シートを充実させ、単元ごとの学習状況を評価規準に照らし合わせながら記入できる形に整える。 ○評価シートと個別の指導計画、指導要録との関連性についての説明を全教職員に行っていく。	○教科の視点で目標を設定していく新しい形の個別の指導計画については、その記入方法や教科の内容を明らかにしていくこと等が定着しつつある。評価規準と照らし合わせながら記入できる形を整えてはいるが、学部によっては単元ごとの記入が行えていない現状もある。 ○全教職員に対して評価シートの活用方法、その意義等について説明を行ってはいるが、本校独自であるということ、作成した先の活用についての不透明性がクリアにならないこと、多忙感といった理由から記入に対して消極性を感じる部分がある。	C	○引き続き指導と評価がつながっていること、その重要性について折に触れて説明を継続していく。 ○新様式の個別の指導計画が求める観点別学習状況の評価と年度末の指導要録との関係性を明確にし、指導者自身の業務の見直しにもつながるものであることがわかるように資料等を作成し発信していく。 ○単元によってはABCでの評価も可能であることを再度発信し、記入する習慣の定着を図る。
	全体		○時間外業務の原因把握と業務カイゼンの推進	○個々や学校全体で業務を見直し、継続的に業務量の平準化を図る必要がある。 ○月45時間、年間360時間を超えて時間外勤務をしている実態がある。	○勤務簿の自己管理を徹底するとともに、教職員アンケートに回答する形で自ら業務カイゼンに参画し、その具体的な改善策を具現化していく。 ※教職員アンケートで8割以上が目標達成のための方策を「できた」と回答	○会議をしない日やノー残業デーを設定し、定時退勤への意識を高めるとともに計画的に勤務をする環境を整え、勤務簿の自己管理の徹底を図る。 ○業務カイゼンに関する教職員アンケートを実施し、一人一人が業務カイゼンに向けての意欲を高めるとともに自ら考えた改善策を学校全体で具現化することに取り組む。	○教職員の88.5%が日々勤務簿の自己管理を徹底するとともに、教職員アンケートに回答する形で自ら業務カイゼンに参画し、その具体的な改善策を具現化していると回答した。 ○夏季休業中に業務カイゼンに関する教職員アンケートを実施し、一人ひとりが業務カイゼンに向けて自ら考えた改善策を提案し、意欲を高めることができた。	B

評価項目	部	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
安全で安心な学校の実現	健康教育部	○児童生徒の健康増進(口腔衛生、食育、性に関する指導、体力向上)に向けた学習の充実を図る。	○コロナ禍を経て健康に対する意識を教職員だけでなく、児童生徒も持つようになった。日頃からマスクをつける等、体調不良にならないよう気をつける児童生徒が多数いる。今よりも「さらに健康に生活するために」という視点で健康増進に取り組む必要がある。健康な生活を送るために食事や性、体力との関係性を理解している児童生徒の割合は低い。	○歯肉炎の予防に向けて歯みがき指導の充実を図っている。 ※歯みがき指導において8割以上の教職員が「おおむねできた」と回答。 ○肥満傾向の生徒が減少している。 ※肥満傾向の児童生徒が3%以上減少している。 ○保健指導(食育、性に関する指導、熱中症予防等)の充実を図ることができている。	○全国小学生歯みがき大会に小学部だけでなく、中学部、高等部も参加する。 ○歯みがき指導(歯肉炎の予防)や健康増進に向けた学習の充実を図れるように、心とからだいきいきキャンペーンを活用し学習部と委員会と連携したり、保護者の意識向上に取り組んだりする。また、外部講師を活用することで児童生徒の意識向上を図る。	・歯肉炎の予防に向けて、日常生活の指導と連携して年に2回歯磨き指導の時間を設定している。また、全国小学生はみがき大会に、小学部(5、6年生)、中学部、高等部が参加した。高等部単一障がい学級では、学校医、歯科衛生士に來校していただき、口腔ケアの学習を行う予定にしている。給食委員会による校内ポスターの掲示制作を行っている。 ・肥満傾向の出現率は、中学部は減少したが、小学部・高等部は昨年度よりも増え、さらに県・全国平均よりも高い状態が続いている。(小学部15.79%(約1%増加)、中学部7.41%(約8%減少)、高等部19.57%(約3%増加)) ・毎月19日が鳥取県における食育の日であることを、情報共有データベースに掲載し、指導者の食育の意識の向上を図っている。また給食委員会とも連携し、リクエスト給食の取り組みをより食育を意識した取り組みに改善した。	B	・歯肉炎の予防に向けた取り組みに関して、現在、高等部単一障がい学級のみが外部講師を招いて学習を行っているが、小学部、中学部でも指導の充実を図るために、戦略的に取り組んでいきたい。 ・体力向上に向けた取り組みをより一層充実できるように学習部、保健体育部と連携し、体力向上推進計画の教員への周知を行う。
	安全・環境部	○安全・安心への意識と体制作り	○各種訓練、研修会、ヒヤリハット等を通して、教職員の安全で安心な環境づくりに対する意識を高めるよう努めている。 ○地震、火事、不審者などの避難訓練の方法や緊急時に使用する機器の扱い等に課題が挙げられている。	○児童生徒が安全・安心な環境で学習できるよう、避難訓練や安全点検、ヒヤリハットでの情報共有を適切に行っている。 ※教職員の8割以上が、「安全・安心な環境づくりを適切に行っている」と回答。	○安全点検を適切に行い、確実に事務部へ報告する体制を整える。 ○ヒヤリハット事例の共有を継続する。重大事案がある際は職朝で確認し、共通理解する。 ○安全・安心への意識を高める体制作りを行うことができるよう、避難訓練等の方法を検討・見直ししながら計画、実施する。	○生徒情報の記入シートについては、支援部が運用する共有ボードにまとめる形で、ヒヤリハットシートの整理を行った。対物に関するヒヤリハット事例については、データベース掲示板を活用し、情報共有していくことを確認した。 ○毎月、安全点検を行った。iPadを用いて点検する形式に慣れ、徐々に定着しつつある。不備のある箇所について報告し、順次修理や改善を進めている。 ○火災の避難訓練では、火元に近い教室の児童生徒はより素早く避難するよう周知し、迅速に行動しながら訓練を行うことができた。	B	○ヒヤリハット事例の共有や安全点検を定期的に行うことを継続し、教職員の安全への意識向上を図る。 ○期間内に安全点検が実施できるよう、継続して呼びかけるとともに、修繕状況の把握に努める。 ○火災と地震の避難訓練を計画し、実践を通して課題が挙げった場合は、改善しながら取り組んでいく。起震車体験を計画し、児童生徒が災害の怖さや対応の仕方を学べる機会を設ける。
	安全・環境部	○より安全・安心な教育環境	○定期的な掃除道具点検、職員作業により、校舎内外の環境が整った。 ○TEAS報告やエコ点検を定期的に行っている。また年度末には点検内容を見直ししたり、データの集計結果を検証して環境整備の呼びかけを行ったりしている。	○安全・安心な教育環境づくりを行うとともに、エコに対する意識が高まっている。 ※エコ点検で◎の割合が8割以上。	○各学部・分掌ごとに、管理場所や掃除道具の整理整頓を呼びかけ、安全・安心で無駄のない環境づくりを行う。 ○委員会・分掌と連携し、環境に関する啓発をしていく。 ○電気、水の使用に関してエコにつながる具体的な取り組みを示すとともに、学期に1度掲示板に水道・電気の使用量やゴミの処分量のデータを載せ、全校への意識づけを行ったり、教職員への協力を呼びかけたりする。	○職員作業について、物品整理が必要な場所をアンケートをとり、作業内容や日時を決め、実施する計画を進めている。 ○エコ点検、エコBOXを利用したり、野菜くずを捨てずに飼育委員会で利用したりするなど、TEASが定着している。 ○水道や電気の利用料を昨年度と比較して、データベース掲示板を通して全職員へ知らせ、意識付けを行った。 ○エコ点検をはじめ、エコについての取り組みは学級によって差がある現状がある。	B	○職員作業について、早めに呼びかけ計画的に実施できるようにする。 ○各学部・部門で取り組んでいるエコ活動についてホームページでさらに取り上げるよう呼びかけ、TEASの意識付けを行う。 ○掃除道具の点検、整備を実施できるよう計画する。

評価項目	部	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
「チームくらよう」の推進	情報教育部	○信頼関係を築ける開かれた学校づくりに向けた本校の魅力ある教育活動の情報発信 ○児童生徒の個別最適・協働的な学びに向けたICT活用 ○働き方改革に繋がるICT活用による効率的な業務改善	○学校ホームページについて、定期的に最新の教育活動の情報を掲載することができているが、古い情報が放置されていたり、文字サイズや配色などデザインの統一性に欠けるところが見受けられる。 ○指導者用端末や児童生徒の1人1台端末整備の遅れがあるためICT活用による学習活動が十分に実施できていない。 ○ペーパーレス化が徐々に進んできたが、教職員のICTリテラシーの差があったり、トラブルへの対応などの問題があったりする。	○学校ホームページによる情報発信の充実を図るとともに、必要な情報にアクセスしやすいようにするなど利便性が高まっている。 ○児童生徒の1人1台端末の活用とともにデジタル教材を取り入れ、学校と家庭の連続的な学びができるよう効果的なICT活用の充実を段階的に図っている。 ○教職員のフォローアップ研修や個別支援を継続しながら、指導者用端末を用いて、ペーパーレス化とクラウド活用を図り、より一層の事務のDX化推進を図っている。 ※教職員アンケートで8割以上が「できた」と回答。	○くらようダイアリーの定期的な更新とともに、学校ホームページの内容やデザインの統一性などレイアウト等の改善を図る。 ○指導者がより効果的な学習指導ができるよう引き続き研修や個別相談を行い、インタラクティブ教材などを活かしながら協働的な学びと個別最適な学びの実現を図る。 ○教職員研修や個別のフォローアップとともに、本校で「ICT活用ガイドンス」を作成することで、分かりやすいICT活用を目指す。また、生成AIの活用による各分掌業務の効率化を実施する。	○教職員アンケートで「そう思う」「だいたいそう思う」合わせて87.5%で改善があったといえる。今後もよりわかりやすい、情報にアクセスしやすい学校ホームページになるようコンテンツやデザインの改善等を推進する。 ○教職員アンケートで「そう思う」「だいたいそう思う」合わせて75%で1人1台端末の活用は十分ではないといえる。児童生徒が使用する端末の整備が遅れているが、今年度は指導者用端末の配布がほぼ完了しつつある。まず教員が以前からの「教員が教える授業」から児童生徒が課題を発見して主体的に他の児童生徒と協働的に学ぶスタイルにしていこうと、また児童生徒の発達段階や実態に合うアプリや指導方法などを検討して活用できるようにすることが重要だと考えている。 ○教職員アンケートで「そう思う」「だいたいそう思う」合わせて82.8%で改善があったといえる。例えばアンケートを実施する場合について、Google Forms、指導方法についてはGemini、学習指導要領について知りたいことはNotebookLMで調べる方法を提案してきた。しかし、まだそのようなデジタルツールの活用は一部の教職員に限られている。	B	○保護者から授業以外の学校生活の様子も発信してほしいなどのご意見もあったので、保護者に求められる情報も注意して発信していきたい。くらようダイアリーの定期的な更新や学校ホームページの内容やデザインの改善を行ったが、意図せずにデザインが崩れることもあった。管理者権限の限定をするなどして管理していきたい。 ○ICT支援員等による相談を通して教員がタブレット端末を授業で効果的に活用できるようにしていきたい。その上で児童生徒が1人1台端末を活用して協働的な学びと個別最適な学びの実現を図るようにする。 ○ペーパーによるデータの処理からデジタルツールの活用によって効果的に業務の効率化が進むと考えられるが、デジタルツールの操作の習得やトラブル対応への支援が必要と考えている。情報教育部をはじめICT支援員やSE等で特に初心者への対応を丁寧にしていきたい。
	支援部（校内）	チームによる生徒指導体制の構築	○校内で発生した生徒指導事案については作成した生徒指導体制の流れに沿って報告、連絡、相談を行い、支援を行っている。しかし、事案によっては、学校全体での周知に至っておらず、対応が遅れたり支援が十分でなかったりすることがあった。	○学校全体で生徒指導体制を共通理解し、迅速、確実、適切な流れで児童生徒への支援を行うことができる。 ※入ってきた情報に対して、生徒指導体制の流れに沿って対応している。	○生徒指導体制について改善、修正を行い年度初めに教職員全体に周知する。必要に応じて学部会などで再度確認し、スムーズな連携につなげる。 ○学校生活アンケート、個別面談等を活用し、実態把握の徹底を図る。 ○学部和支援部の連携を特に意識し、日常的な情報共有を心がける。	・トラブルや問題行動、またいじめが疑われる情報が入ってきた際には即日会議を開催している。 ・情報共有することの重要性を研修会等で教職員に周知するようにした。 ・必要に応じて外部機関と連携し、生徒指導対応を行っている。 ・情報が共有されるまでに時間がかかってしまったりすることがある。 ・学校生活アンケート後、アンケートの内容に関わらず個別面談を児童生徒と行うようにしている。 ・校内指導体制のフローチャートを整え、職員がいつでもすぐに閲覧できるよう、職員間の情報共有データベースに掲載した。	B	・「共有ボード」の活用により、職員間の情報共有を図る。 ・整えたフローチャートに沿って生徒指導対応を行う。 ・共有ボードを日常的に確認、入力する習慣をつけるため、定期的に呼びかけを行う。合わせて、入力方法を分かりやすく提示する。 ・生徒指導体制の理解が深まるよう、生徒指導対応の流れを、定期的に情報共有データベースに掲載する。
	支援部（地域）	地域校への早期支援の充実	○日々地域の園、小、中、高校等からの教育相談にあたっている。昨年度は年度当初から多くの相談業務があり、年度末にはすでに次年度の相談依頼もあった。対応をするにあたり、早くからサポートを行った方がより良い支援につながるケースが多く、早期支援の重要性を感じている。	○地域校に対して早期からのアウトリーチ型の支援を行う。 ※本校が早期支援として受けた教育相談の内、状況の改善したケースが8割以上。	○中部地区の特別支援教育担当者会でセンター的機能の取り組みについて情報発信をする。また、本校から地域校に対して困り感や気になっていること等がないか聞き取りを行う。 ○これまでと同様に関係機関との連携を密にし、情報収集を行う。 ○早期支援の検証、評価を支援部全体で行う。	・(地域支援関係)依頼相談を受け、教育相談を行っているが、早期のケースを見つけてアプローチするには小中学校等と密に連携する必要がある。相手校の体制や状況を考慮し、継続支援が必要な場合は次の相談のアポイントメントを取るようになっている。 ・地域校の教員の専門性向上を目的とした事業の案内を配布し、対象となる学校への働きかけを行った。 ・(高校支援関係)中部地区の高校へ発達障がい支援センターエールとともに定期的に訪問した。 訪問時に次の訪問日を設定することにより、定期的な訪問が途切れないように心がけた。 ・(通級関係)通級フォローアップの際に相手校のスクールカウンセラー、支援員とつながることができた。そのため、生徒が安心して高校生活を送れる環境作りを段階的に実施できた。 ・通級定例会で定期的にエール、中部教育局、LD等専門員と情報交換することで、連携して支援にあたるきっかけになった。 ・(LD等専門員関係)先手のアプローチができるよう地域校への働きかけを積極的に行う必要がある。 ・中部圏域のLD等専門員と連携を密にしながら日々の相談活動に取り組んでいる。	B	・教育相談は、一度相談を受けたケースは、そこで終わるのではなく、継続して支援することで早期のサポートにつながるの、次につながるよう、積極的に相手校と連携をとるようにする。 ・今後も、地域校の教員の専門性向上を目的とした働きかけを継続する。 ・今後も定期的に巡回相談を実施すると共に、相談だけで終わらないように経過についても聞いていくようにする。 ・次回の予定を決めることで、継続して経過を同う。継続的な関わりを保つことで、新たな課題が発生した際にも早期にご相談いただける体制を築き、迅速な解決へと繋げていきたい。 ・地域校の校内において支援を必要とする児童生徒の早期発見および早期支援に繋げるため、地域校と事例の共有を図る。

	キャリア教育部	○保護者や教職員の研修会への参加 ○教職員のキャリア教育への理解を深める	○集合型の中部地区福祉セミナーを実施し、小学部や中学部の保護者も参加することができた。また、視察研修会や人権教育研修会などを計画的に実施し、キャリア教育により卒業生の動向等を掲載するなど、啓発を行ってきた。より啓発を図るため、今後も継続して実施するとともに、参加者が増えるように開催の工夫を行う必要がある。	○中部地区福祉セミナーへの呼びかけを地域に広げる。 ※中部地区福祉セミナーや各研修会の参加者が前年度よりも増えている。	○中部地区福祉セミナーの参加対象者を中部地区小中学校、県内の全特別支援学校へ拡大する。 ○保護者、教職員を対象とした福祉事業所等の視察研修を実施し、開催時期を夏休みに設定して、参加を促す。 ○保護者、教職員に西中校区同研への参加呼びかけをする。 ○各研修会等の参加者が増えるように担任からの呼びかけを強化する。 ○キャリア教育だよりの発行。	○中部地区福祉セミナーは、参観日に併せて開催したことでの学部保護者も多く参加された。ブースでの説明も時間で交代でなく、自由にしたこと多くの参加者に事業所等の説明を聞いてもらうことができた。しかし、アンケート回収をQRコードで募った結果、ほとんど回答が得られなかった。 ○保護者教職員対象視察研修では、保護者は昨年度とほぼ同じ12名、教職員は8名参加し、2カ所の事業所を見学した。参加者からの感想では子ども、受け持ち生徒の将来の生活を考える上で有意義な研修であったとの意見が多数あった。 ○本校開催である西中校区同和教育研究会は多くの教員が参加し、運営等も協力して行ったが、開始時間が18時30分と遅く、保護者の参加はほぼなかった。 ○キャリア教育だよりをキャリア関連の行事ごとに発行できている。	○福祉セミナー開催に向け、ブース設営の工夫、事業所への依頼、ミニ講演会の開催などを検討していく。アンケート専用ブース(その場で書く)を設置する。 ○視察研修は事業所の受け入れ人数の関係もあり、あまり多くは増やせないが、保護者、教員共に新規参加を促していく。 ○保護者対象の人権教育研修会を計画的に実施する。 ○キャリア教育だよりを今後もタイムリーに発行することに努める。
--	---------	--	--	---	---	---	---

B

評価基準 A:十分達成 B:概ね達成 C:変化の兆し D:まだ不十分 E:目標○方策の見直し

【100%】

【80%程度】

【60%程度】

【40%程度】

【30%以下】